

|         |                                      |
|---------|--------------------------------------|
| 氏 名     | さか もと ひろ し<br>阪 本 博 志                |
| 学位の種類   | 博 士 (文 学)                            |
| 学位記番号   | 文 博 第 299 号                          |
| 学位授与の日付 | 平 成 16 年 11 月 24 日                   |
| 学位授与の要件 | 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当              |
| 研究科・専攻  | 文 学 研 究 科 行 動 文 化 学 専 攻              |
| 学位論文題目  | 雑誌『平凡』に見る1950-60年代<br>勤労青少年文化の社会学的研究 |

論文調査委員 (主 査) 教 授 寶 月 誠 教 授 松 田 素 二 教 授 落 合 恵 美 子

### 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、1950-60年代の雑誌『平凡』誌上に現れた勤労青少年の文化的営みをあとづけるものである。この過程においては、文献資料のみならず同誌の「送り手」「受け手」双方のインタビュー・データをも用いる。

本研究が対象とする1950-60年代勤労青少年文化の対極には、大学生の文化を位置づけることができる。竹内洋によると、1950年代から60年代にかけての学歴エリートにおける支配的な文化は教養主義であり、その特徴は進歩主義（社会革新）と平等主義であった。そしてこれは安保闘争・全共闘運動などの政治運動に繋がっていった。この1950-60年代教養主義の媒体が総合雑誌であったのに対し、当時の勤労青少年に最も愛読されたのは『平凡』『明星』であった。特に『平凡』は、当時『明星』よりも高い支持を得ていた。したがって、本研究では、1950-60年代勤労青少年文化を解明するに当たり、勤労青少年文化の軸となる媒体として『平凡』を設定する。

高度成長の結果、1970年代に入り「新中間大衆社会」（村上泰亮）「平準化された大衆社会」（富永健一）が到来した。竹内によると、この中で（かつての「知識階級」としての「サラリーマン」ではなく）「グレーカラー」化した「サラリーマン」文化が蔓延し、教養主義が衰退を迎えた。また、学歴エリートの多くは、モラトリアムを社会的には終えてもそれを内面に維持したまま社会に参加していったことが、栗原彬らによって指摘されている。そして今日、情報化・消費化社会の中で「フリーター」「パラサイトシングル」（山田昌弘）等多数の若者たちが長期にわたって社会の「アウトサイド」に位置し続けていることが問題視されており、「若者が層として没落していく社会に、もはや明日はない」と警鐘が鳴らされている（宮本みち子）。

「勤労青少年」は現在も存在するものの、本研究が対象とするのは、「平準化された大衆社会」の到来或いは「サラリーマン」文化の蔓延以前の勤労青少年文化である。そして、この研究の目的は次の3点にある。それは第1に、1950-60年代勤労青少年文化の実像を明らかにすることである。勤労青少年は同時代の若者において多数派であったが、学歴エリート中心である従来の戦後若者文化史研究の対象とされることは乏しかった。また、この時期の勤労青少年研究は労働と学習を大きなテーマとしており、施策によって勤労青少年を導くことを目的としたものが多く、勤労青少年の文化的側面に対するまなざしは希薄であった。第2に、第1の成果を踏まえ学歴エリート中心の従来の戦後若者文化史の図式を書き換えることである。第3に、この新しい図式から、今日の若者の危機的状況を乗り越えるための示唆を得ることである（以上、1章「学歴エリート中心の若者像と雑誌『平凡』に見る勤労青少年文化」）。

『平凡』の沿革をメディア史研究の角度から見ると、1950年代、60年代、70年代の特色は以下のとおりである。

1950年代において『平凡』は、グラビアと連載小説を2本の柱とし、それぞれがラジオ・映画に立体的に且つ複雑に結びついていた。グラビアや記事は、「仰ぎ見る存在」であったスターを「身近な存在」として読者に感じさせた（江藤文夫）。また、多様な読者参加企画を通して、読者が誌面や（誌面と結びついた）ラジオ・映画の世界に繋がっていく回路がつけられた。1953年から59年にかけて『平凡』は「読書世論調査」（毎日新聞社）の「いつも読む月刊雑誌」において2位であり、

読者全般におけるこの相対的位置の高さは、日常生活における娯楽の中での『平凡』の重要性の高さの反映であった。こうした世界は、大学生の文化とは大きな隔たりのあるものであった。

1960年代において『平凡』は、テレビの普及に伴うマス・コミュニケーションの再編に伴い、グラビア・小説がラジオ・映画と立体的に且つ複雑に結びついていた1950年代における「大衆娯楽雑誌」としての姿を解体させていった。それとともに、読者全般におけるその相対的位置も低下した。

1970年代において『平凡』は、高校進学率の上昇やカラーテレビの広範な普及を背景に、小・中・高校生を対象にした「アイドル雑誌」になった。これは、「仰ぎ見る存在」を「身近な存在」として感じさせるものではなく、テレビの歌謡番組に登場する「擬似的仲間」（小川博司）としてのアイドルの姿を、テレビを補うかたちで見せるものであった。また、情報によって消費を創出していく情報化・消費化の流れの中で、（『平凡』のように）実売収入に重点を置く雑誌よりも、広告収入に重点を置く雑誌が主流となっていった。（以上、2章「『平凡』の沿革のメディア史的研究—1950年代前半を中心—」）

1950年代の『平凡』誌面に見る勤労青少年の文化的営みには、「受け手」がメディアに働きかけていくメディアレベルと「受け手」の生活世界レベルの2つのレベルが存在した。

メディアレベルでの営みにおいては、テレビ普及以前・経済成長以前の時期に「受け手」がその意味世界の中で『平凡』に重要な意味を付与するとともに自身と同様の他者を想像することで「想像の共同体」（アンダーソン）を形成していた。そしてこれを基盤として、「受け手」が投書等のかたちで「送り手」に働きかけていた。この営みの中からさまざまな企画が展開されるとともに、これらの展開が、より一層「受け手」をひきつけた。このようなメディアレベルでの営みにおいては、「受け手」が「送り手」に働きかけ「送り手」をも巻き込み、『平凡』の部数の躍進と多様な企画の展開を支えていた。

一方、生活世界レベルでの営みは、10万人以上の会員を擁し全国規模でその活動が展開された読者組織「平凡友の会」に見出すことができる。これは、娯楽の乏しい時代において、『平凡』で身近な存在として感じられたスターとの触れ合いを『平凡』を「利用」して求めたり、友達づくりをおこなったりするものであった。「平凡友の会」は、このようにして日常生活の中に娯楽を自分たちで作りだしていくものであり、政治運動と結びつくものではなかった。また、この営みにおいては、「友の会」の財団法人化への希望、販促への利用や無関心といった、「送り手」側の多様な意図も存在していた。

1960年代における『平凡』の「大衆娯楽雑誌」としての性格の解体とともに、「受け手」の受容のあり方も変化した。また、読者全般におけるその相対的位置の低下とともに、1950年代のメディアレベルの営みの基盤になっていた「想像の共同体」は解体していった。これらから、メディアレベルでの営みは衰退した。また、「平凡友の会」も60年代前半に衰退した。（以上、3章「『平凡』読者の営みと「平凡友の会」—1950年代～60年代前半—」）

1960年代の『平凡』誌面では、勤労青少年の生活世界レベルの営みとして勤労青少年サークル「若い根っこの会」を見ることが出来る。ここにおいては、「平凡友の会」と共通する内容として、芸能人をも交えた活動が展開されるとともに友達づくりがなされた。このように両者の形態に連続性がある一方で、「平凡友の会」が全国的なものであったのに対し「若い根っこの会」は都市に集中したものであった。同会は、都市に移住した勤労青少年が「疎外感、孤立感からの救済」（見田宗介）を求めた保守的な色合いの濃い青年運動であり、当時社会的に注目を集めていた。

『平凡』誌面で取り上げられた同会記事を追うだけでは文化的営みをあとづけるという本研究の趣旨に合わないため、本章では1960年代当時の同会会員による手記の分析をおこなった。その結果次の3点が明らかになった。それは第1に、貧・病・争並びに過酷な労働環境を記したものが1967年を境に減少したことである。第2に、苦労を人格の向上や幸福に結びつける考え方や仕事を通した社会参加・社会貢献等の意識が見られたが、これらにも1967年以降変化が見られたことである。第3に、第1第2に伴い、同会に集う動機が、厳しい環境に立ち向かう動機を強化するためというものから、思い出作りのために変化したことである。これらの変化の背景には「いざなぎ景気」があるが、これらに加え、進学率の上昇によりこうした「根っこ」にあたる人びとが姿を消していった。この60年代において、『平凡』の「読者共同体」（シャルチュエ）としての勤労青少年の文化は終焉を迎えた。（以上、4章「若い根っこの会」に見る勤労青少年文化—1960年代『平凡』を手がかりに—）

5章「結論—雑誌『平凡』に見る1950-60年代勤労青少年文化とその今日的意義—」においては、まず、1950年代60年代70年代それぞれの時期における背景・『平凡』・（『平凡』誌面に見る）勤労青少年・大学生を、これまでの議論に基づき整

理した。

『平凡』に見る1950-60年代勤労青少年文化は、1950年代におけるメディアレベル・生活世界レベルの営みから1960年代における生活世界レベルのものへと移行していた。これは、政治運動と繋がった同時代の教養主義とは異なるものであった。また、1960年代に「若い根っこ」の会と並んで取り上げられた、勤労青少年を主体とする青年運動である民青・創価学会青年部のような何からの直接的行動により現状の変革に向かうものではない点で、これらの団体とも異なるものであった。

この1950-60年代勤労青少年文化は、今日から見て以下の2点から重要である。それは第1に、1950年代におけるメディアレベル・日常生活レベルの営みは「創造的エネルギー」（鶴見俊輔）が発揮されていたものであったことである。1950年代におけるメディアレベルでの営みから展開された大衆文化における多様な企画は、今日の雑誌が展開する以上のものであるとともに、のちのポピュラー文化における企画の原型が存在するものであった。また、1950年代における生活世界レベルでの営みにおいては、『平凡』を「利用」し娯楽の創造がおこなわれていた。第2に、（1950-60年代当時の『平凡』に見る勤労青少年文化に限定して言えば）日本の生産力を「根っこ」で支えた勤労青少年の労働が第1の「創造的エネルギー」の発揮と繋がっていたことである。

今日の若者文化の成立過程の歴史社会的な把握を試みると、学歴エリート中心ではなく、先述した整理のような学歴エリート・勤労青少年両者を把握した形で戦後若者文化史を捉え直すべきである。このようにして再図式化された図式からは、次の2点が明らかである。それは第1に、現在の「アウトサイダー化」やその延長上に想定されている社会の危機は、情報化・消費化やモラトリアムの延長といった戦後若者文化史の要素の、いわば負の側面が集約されたものであることである。第2に、上述のように、労働を通じた勤労青少年の社会参加が「創造的エネルギー」の発現と繋がっていたことである。

この勤労青少年文化の文化的営みそのものを現代社会において再構築することは、不可能である。なぜなら、これらの営みは、特定の時代的背景のもと成立したものだからである。しかしながら、現在顕在化している上記の負の側面を乗り越えていくためには、戦後日本の生産力を支えた労働と「創造的エネルギー」の発揮が繋がっていたことを再検討・再評価していくことが、必要であろう。これまで忘れ去られていた勤労青少年の文化的営みに学び、現代の社会背景・メディア状況に応じたかたちで且つ体制等に利用されないかたちで、かつて労働と結びついていた「創造的エネルギー」を、「アウトサイダー化」しつつある今日の若者の文化が取り戻していく必要があるのではないか。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、戦後の大衆雑誌『平凡』の分析を通して、勤労青少年文化の実態と、その戦後史的意味を解明したものである。『平凡』は1945年に凡人社（後の平凡出版、現在のマガジンハウス）によって創刊され、48年に文芸娯楽誌から流行歌と映画を二本柱に据えた大衆娯楽雑誌へと転換するや大きく部数を伸ばし、1955年には140万部を発行した。都市部と郡部、男女の別を問わず若い勤労者層に幅広く読まれ、戦前の『キング』と並ぶ国民大衆雑誌となった。しかしその後60年代に入ると次第に勢いを失い、70年代にはアイドル誌に変貌して、87年に休刊に至る。本論文はこうした『平凡』の変容を追いながら、学歴エリートである大学生文化とは別個に存在していた勤労青少年文化が、独自の論理と心性に基づく活動を展開し、やがて「社会の平準化」に伴って解体していく過程を丹念に跡づけている。

本論文の意義は、三点に整理される。

第一の意義は、戦後の若者研究が学歴エリートをおもな研究対象として、その教養主義や政治的活動に関心を集中する傾向があったのに対し、本論文では従来見過ごされてきた勤労青少年層を対象とし、その生活意識や文化活動に着目したことである。そもそも1955年の大学進学率は未だ約8パーセントであり、大学生は少数派にすぎなかった。また、この時期は高度成長期が始まる時期に当たっているが、高度成長は社会の中枢を担ったエリート層以上に、安価で質の高い労働力を供給した勤労者層の貢献によって実現したと言われている。この階層を視野の外に置いては、高度成長期の日本社会を描いたことにはならない。本論文は、勤労青少年に焦点を当てることによって、戦後日本社会の歴史社会学的研究の大きな欠落を埋めたと可以说うことができる。

1950年代の『平凡』は、今日の雑誌受容からは考えられないような、読者間の、また読者と雑誌との間の連帯感に支えられていた。熱心な投書が寄せられ、読者参加企画も少なくなかった。同時期の大学生は総合雑誌をめぐって「読者共同体」

(シャルチエ)すなわち「知識人の公共圏」を形成していたが、勤労青少年は『平凡』(や『明星』)をめぐって「読者共同体」あるいは「大衆の公共圏」を形成していたのである。その連帯の触媒となったのが、流行歌と映画とスターであった。

『平凡』読者の連帯は、「想像の共同体」(アンダーソン)には留まらなかった。1949年には読者投稿欄から「平凡友の会」が誕生し、文通と支部活動で直接に交流する活動を始めた。本論文では、「平凡友の会」と連続するものとして、就職のために都市に出た地方出身者の運動である「若い根っこの会」にも1章を割いている。「若い根っこの会」はこれまで「創価学会青年部」や「民青」と対比されて、「雇用主協力的な保守的運動」に分類されてきたが、故郷を離れて零細企業にはたらく若者たちが「孤立感、疎外感からの救済」(見田宗介)を求めて集い、苦労を人格の向上や幸福と結びつけて語る人生観を手記に記したのは、彼らの労働環境や生活環境ゆえのことと理解できる。

本論文の第二の意義は、メディア研究への方法的貢献である。『平凡』を分析するにあたって、本論文は単なる内容分析に終わることなく、メディア受容のしかたを徹底的に追究している。上述のような「受け手」の主体的関わりもそのような分析の中から明かになってきた。メディア受容の分析のため本論文が多用しているのが、「送り手」と「受け手」双方へのインテンシブなインタビューという方法である。各地の関係者を探し出し時間をかけて信頼関係を築くという根気と配慮が必要な方法と言える。関係者の高齢化、時間の経過に伴う記憶の風化、資料の散逸等の状況を考えると、現時点でおこなっておかなければ永久に埋もれたままになってしまいかねない貴重な証言を、粘り強い調査により引き出した功績は大きい。

本論文の第三の意義は、時系列的分析によって、勤労青少年文化の変質・解体と大学生文化との境界の不明化の過程を描き出したことである。「若い根っこの会」の手記に記された人生観には、1967年頃に変化が見られることを本論文は発見した。苦労を人格や幸福といった価値と直接に結びつけるのではなく、苦労しない生も可能と捉えるようになるのである。仕事中心から私生活中心への変質も見られる。その説明として手記が述べる「昭和四〇年代に入ると、たしかに経済は伸びてはきたが、自分たちの将来はきわめて低成長だという気持ちになってきた」という認識は、勤労者層の賃金上昇と、豊かさと共に生じた閉塞感を反映したもので、勤労者層の文化的アイデンティティの弱まりと、若者文化の階層差の消滅を意味している。「平準化された大衆社会」の到来である。

以上のように本論文は、戦後勤労青少年文化の性格とその変容を綿密なメディア分析により明かにしたもので、戦後日本社会研究に重要な貢献をなすものである。大学生文化と勤労青少年文化との相互作用の解明や、現代の若者の状況に対する示唆など、物足りない点もあるが、こうした点は今後の研究で乗り越えられていく課題で、論文の価値を損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2004年10月14日、審査員3名が論文内容とそれに関連した事柄についての口頭試問を行った結果、合格と認めた。